

IV 花 き

実 況

1 キク

奥越地区では、2月中旬現在で150cm以上積雪しており、消雪遅れによる生育遅延が警戒されている。春植え夏秋ギク用親株ハウスは最大積雪時に除雪が2回行われ、シュートの発生がやや遅い。冬至芽摘心作業は1月下旬に行われた。

あわら市では2月上旬に夏～夏秋ギクの採穂が行われた。生産農家の一部ハウスに積雪の被害が発生した。

福井地区では、夏秋ギク親株の冬至芽摘心作業を1月末～2月上旬に実施された。生産農家の一部ハウスに積雪の被害が発生した。春植え夏秋ギク用親株は、ハウス内での生育がやや遅い。一部のハウスではアブラムシが多発生しており、白さび病が少発生。

南越、丹生地区でも、ハウス内で春植え夏秋ギク用親株を育苗中である。アブラムシが少～中発生している。

二州、若狭地区の春植え8月咲きキクは親株管理中である。

2 スイセン

スイセンの出荷ピークは12月上旬となり、年内までの出荷量は

81万本(昨年83万本)と昨年並みとなったが、年明け以降は21万本となり、昨年の13万本より多くなった。抑制作型の出荷が続いており、2月21日時点の総出荷量は、102万本であり、昨年の96万本よりやや多かった。

3 ユ リ

坂井市春江町の福井ユリは、1月中旬から一作球根の掘り上げが行われており、順次定植されている。一部のハウスが積雪により被害を受けた。

4 トルコギキョウ

あわら市のトルコギキョウの栽培ハウスは積雪により被害を受けた。

越前市では、9月中旬播種で11月13～20日に定植された。「ボヤージュグリーン」、「一番星」等でトンネル被覆を行っている。草丈約2cm、展開葉は5対。2度切り栽培のトルコギキョウは草丈2cm(昨年6cm)で分枝数も3～4本ぐらいとなっている。

5 ストック

あわら市丘陵地のストックはほぼ出荷が終了し、3月出しが一部残っている。

越前市の8月中下旬播きの「カルテット」シリーズは2月21日調査で現在出荷終盤であ



る。9月12～20日播種ものは草丈72～75cm(85～95cm)で2月中～3月上旬出荷直前である。

若狭地区では11月中旬日定植のアイアンシリーズが草丈35cm、12月上旬定植のカルテットシリーズが草丈30cmとなっている(2月18日調査)。

6 ウメ花枝

平成29年度のウメ花枝の出荷本数は139.1万本(昨年度139万本)であった。生産単価はやや高い。

対 策

1 秋植え夏ギクの春先管理

- (1) 古い茎葉は病害虫の一次発生源となるので、消雪後の出芽前後に地際部から除去する。特に、黒さび病の罹病が認められる品種は、除去後の古枝を肥料袋等で回収し、圃場外で速やかに処分する。
- (2) 防霜対策として、出芽してきたシュートを保護するために不織布でべた掛けする。べた掛けは開花も早まる可能性があるため、よく畝を観察し、1、2割のシュートがのぞいた時を見計らって行う。
- (3) 暮れに施した硝酸態の肥料は、ほとんど流亡しているため、基準量をしっかりと施用する。
- (4) 春肥施用後、畝溝の溝さらえを兼ねて2～3cmの土寄せを行う。

2 春植え夏秋ギクの採穂と挿し芽

- (1) 採穂の1～2日前に親株の病害虫防除を徹底する。芽の伸長初期には、保護殺菌剤の散布により、黒斑病や褐斑病、白さび病防除を徹底する。
- (2) 採穂時間はしおれやすいため、早朝に取るのがよい。
- (3) 摘心した親株から採穂する。挿し穂は手で摘み取り、展開葉3～4枚をつけ、長さ5～7cmに調整する。
- (4) 挿し芽間隔は葉と葉がわずかに触れ合う程度とし、深さは1.5～2cmとする。
- (5) 軽い挿し芽用土は作業性がよいため、パーライト5+クンタン5、パーライト5+ピートモス5、山砂7+ピートモス3などを用いる。一部の地域では、モミガラ単用で利用されている。
- (6) 挿し穂は冷蔵すると挿し芽後の生育がそろろう。冷蔵する場合は、発泡スチロールの箱に、挿し穂の切り口を下にして1列に並べて詰め込み、5℃の冷蔵庫に7～10日、2℃で2週間まで冷蔵できる。

3 春植え夏秋ギクの定植準備

- (1) 春先の圃場排水を行い、旧盆ギクは4月15日までに定植できるよう作業を進める。
- (2) 肥料は有機質肥料を主体に窒素成分で中輪ギク3kg/a標準とし、この内1～2割を、そさい5号等の速効性化学肥料とする。

(3) 定植圃場の耕耘は、土壤水分が適切な状態の時にロータリーの刃の回転をあげて行う。

4 トルコギキョウの定植準備と定植

- (1) 圃場は土が柔らかく、排水性が良いことに加えて、20cm以上の高畦とする。
- (2) 基肥はa当りF₁品種で窒素成分を1～1.3kg、リン酸は1.5kg、カリは2kg程度施す。
- (3) 苗が根づまり、老化しないように、本葉1～2対頃を目安に早植えする。15cm×15cmの6条植えとする。定植時に直根を切ると生育が悪くなるので注意する。
- (4) 土壤酸度(pH)は非常に重要であるので、必ず測定して6.5程度に矯正する。
- (5) 定植3～4日前に、植付け場所に十分灌水する。また、育苗箱を定植場所に持ち込み順化を行う。育苗箱に弁当肥(液肥500倍)を施しておく。
- (6) 定植後は液肥1000倍を灌水がわりに施す。その後1か月間は週1回液肥を施す。
- (7) 花のボリュームを出すため、花芽分化が始まる本葉8対(草丈が15～20cm)頃までは適宜、水分や肥料を十分に与える。
- (8) 二度切り栽培は草丈が10～20cmに達した時点で、生育が良い枝を2本程度残してその他の枝を取り除く。

5 スイセンの施肥管理

養成中のスイセン球根を肥大させるため、3月上旬までにそさい5号を10a当たり40Kg施用する(窒素成分量6kg/10a)。

6 ヒマワリの播種と育苗管理

- (1) 天幅90cmの50m畝で種子量は5dℓ(約4000粒)を必要とする。
- (2) 200穴のセルトレイの吸水はトレイの底から水を吸わせる。種子は播種前日に水につけて吸水しておく。種子は一粒ずつ横向きに並べ、覆土をして新聞紙で覆い、十分灌水する。
- (3) 発芽温度は、20℃以上(発芽適温26℃)を確保する。低温で発芽揃いが悪くなると、その後の生育が不揃いになる。
- (4) 3～4日で発芽が始まるので、新聞紙を取る。発芽時に子葉についている種皮は手で取り除く。
- (5) セルトレイ苗は、最初の本葉が展開した頃(播種10日後)に遅れないよう定植する。
- (6) 定植は角材の先をプラグ苗に合わせて削り、土に穴をあけ苗を植える。軽く隠れるぐらいに覆土し灌水する。
- (7) 生育初期に10℃以下の低温に遭うと生長が止まるので、低温の時はビニルでトンネルする。